

AND 賞
Archi-Neering Design AWARD
第4回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2023





ジャンボ鯉のぼり (1988-、川口衛)

科学（力学）と工学を駆使して生まれた芸術と技術の、美しくダイナミックな姿形。

AND賞の目指すもの

AND賞が目指すものは、完成された建築作品としての評価だけではなく、そのプロジェクトがもつ固有の技術的テーマ（構造や環境など）を明らかにし、デザインプロセス、しくみ（システム）やしあげ（ディテール）、素材や施工法などを真摯にイノベーティブに追求する人やチームを表彰することである。

「AND」とは、AND展で見えてきたもの

アーキニアリングデザイン（AND）とは、「建築と技術の融合・触発・統合の有様とそれを志向する理念」のことである。2008年より12年以上にわたって国内外で開催されてきたAND展では、時に150点余の模型・パネルが並び、数多くのフォーラムが開催された。

そこから見えてきたものは二つ。

第一に、「建築は織物だ」ということ。連綿と引き継がれる「技術」のタテ糸は強靭であり、感性や社会的欲求を映す「芸術」のヨコ糸により、時代の模様が描かれている。その交点には常に両者の葛藤や協同の物語がある。

第二に、「技術は空間を介して建築とつながっている」ということ。意匠が失われても空間はあるが、構造なくして空間は成立しない。イメージとテクノロジーの有機的な融合・協同の結果として、「美しく合理的な」「合理的で美しい」建築の空間形態が生まれている。そのことは歴史的にも検証されていよう。

AND賞で評価したいと考える視点

今の時代の頂点としての「点」の建築の評価は既に多くの建築賞で選定されている。

AND賞は時代が求める建築を、作品という「点」として捉えるのではなく、美しい歴史的建築を実現に導いた一連の芸術と技術の融合というプロセスから学び、未来へ繋げていくという「線」や「面」のような普遍的・横断的視点をもって追求する一貫した姿勢と業績を評価したい。

- ▷ 発想から実現に至る技術的テーマ性のあるデザイン・プロセス
 - ▷ 個性的作品性だけではない普遍的技術の創造
 - ▷ システム・素材・ディテール・工法などの新しい発想・工夫
- 新築、恒久的な建築作品だけでなく、再生や仮設、橋など建築以外の構造物、階段などの部位や家具・オブジェなどスケールの小さな作品も本賞の対象としたい。

第4回 AND賞をめぐって

AND賞実行委員長 斎藤 公男



斎藤 公男
SAITO Masao
A-Forum 代表
日本大学名誉教授

1938年群馬県生まれ / 1961年日本大学理工学部建築学科卒業 / 1963年同大学院修士課程修了 / 1973年同大学理工学部助教授 / 1991年同大学理工学部教授 / 2007～2008年日本建築学会第50代会長 / 2008年日本大学名誉教授

主な受賞：1987年日本建築学会賞（業績）、1993年松井源吾賞、1997年IASS(国際シェル・空間構造学会)坪井賞、2002年Pioneer Award、1978年・1991年・2003年・2021年BCS賞、2007年日本建築学会教育賞、2009年IASS Torroja Medal、2018年日本建築学会大賞

主な著作：「新しい建築のみかた」（エクスナレッジ）、「空間構造物語」（彰国社）

2024年2月22日、第4回となるAND賞2023の最終選考会を無事終えることができました。選考会場となったのは昨年と同様に日本大学理工学部の「CSTホール」。長時間の熱心な選考を重ねて頂いた福島加津也委員長をはじめ堀越英嗣、陶器浩一、磯達雄の諸氏に敬意と感謝を表します。また難しい会の運営を支えて頂いた運営委員、実行委員の方々にも御礼を述べたい。そして何よりも、日頃多忙を極める中でAND賞に応募された多くの皆さんに感謝申し上げます。時代を切り拓くテーマ性の強い魅力的な作品からは興味深い大きなを感じることが出来ました。

AND賞への応募数は第1回より第3回まで各々、55件、40件、27件。そして第4回となる今年は32件でした。これまでの経緯からも予想されたことでしたが、今回のAND賞も一次選考（2023年12月16日）の段階から議論が沸騰しました。惜しくも入賞を逃したいくつかは、別の機会にもっと踏み込んだプレゼンを聞きたい、現地見学をしたいとの感想をもちました。私自身、いずれ機会があれば、と願っています。

さらに最終選考に進んだ10作品はいずれも力作。これは難航するな、との予感通り、各自のプレゼンを終えた後の選考会場は異様な空気に満ちていました。緊張感に溢れたその状況は選考委員の各々から発せられた「評価軸の多様性との対峙、苦渋の判断と決断」の言葉からも充分読み取れました。各委員と応募者との緊迫したやりとりやコメントの数々は実際に興味深く、まさに「AND賞に学ぶ」の感。残念ながら私が心の中で推したいいくつかの応募作品は優秀賞を外してしまいましたが…。

優秀賞から最優秀賞への選考はさながらドラマ。ついに4名の選考委員の票が割れて、決着がつかず（2つの評価軸が拮抗したためか）最終決定への参考意見が実行委員長の私に問われることになったわけです。AND賞の難しさ、奥深さを物語る事かも知れません。来年の選考方法への検討課題といえそうです。作品のテーマも実に多様。防災・仮設・ストラクチャラルアート・ハイブリッド構造（RC・木・鉄）・屋外回廊・環境創出・自然な住宅・混成空間・アルゴニズムデザイン・工芸的架構との協働など。そこには社会・人間・自然を包含する今日的課題への切り込みや、イメージ（つくりたいもの）とテクノロジー（つくれるもの）の間に漂う「2つのベクトル」の様相と融合が強く感じられました。

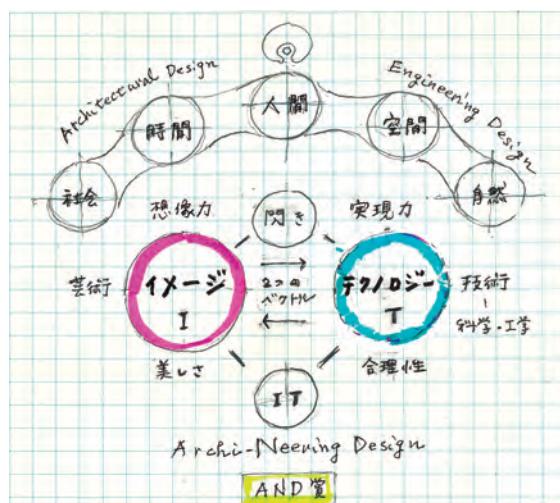
AND賞とは何か。

今回の選考会でも各々の選考委員が抱くAND賞に対する評価軸が吐露された。個性をにじませながらも大局的にはぶれない価値観は共有されている。そう感じられました。ANDの理念に興味を抱く人々の思考と情熱が築き、創っていくもの。それがAND賞の最大の特徴といえそうです。

21世紀の今日、20世紀には予想できなかつたいくつかの「事件」が目の前に現れてきました。1つめは行き過ぎた文明社会。神話の古代より変わらない人間の願望・欲望が招いた戦争や環境破壊は止まらない。2つめは頻発する地球災害。地震・津波・気候変動は激増していく。3つめはデジタル技術の進化・拡大。アルゴリズムの浸透はとどまる処を知らない。そしておそらく日常的に我々にとってこのITの影響力が最も大きい。一方で別の声も聞こえてくる。BIMやAIはあくまで人間の思考や技術的判断や効率化のための手段（Tool）のひとつ。それ以上の存在ではないと。

人間は一体どこに行くのであろうか。不安もあるが夢や希望を抱かねばならない。直感的な閃き、想像すること。思考・工夫のプロセスやデザイン（設計・施工）の物語を紡ぐことが人間力の起点となるはずです。そうしたことを問い合わせ、挑戦することこそ「AND賞」がめざすものではないでしょうか。

Imagining the Future, Challenging Dreams!



選考経過と総評

AND 賞選考委員長 福島 加津也



福島 加津也
FUKUSHIMA Katsuya
建築家
福島加津也
+富永祥子建築設計事務所
東京都市大学工学部建築学科
教授

1968 年 神奈川県生まれ /1990 年 武蔵工業大学工学部建築学科卒業 /1993 年 東京藝術大学大学院美術研究科修了 /1994 年～ 2002 年 伊東豊雄建築設計事務所 /2003 年～現在 福島加津也 + 富永祥子建築設計事務所 / 現在 東京都市大学工学部建築学科教授
主な受賞： 2005 年 JIA 新人賞 /2019 年 住宅建築賞金賞 /2015 年 日本建築学会賞（作品） /2018 年 ユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞 /2020 年 DAM ARCHITECTURAL BOOK AWARD (ドイツ建築博物館)
主な作品： 2004 年 中国木材名古屋事業所 /2008 年 柱と床 /2013 年 木の構築 - 工学院大学弓道場 + ボクシング場 /2017 年 時間の倉庫 - 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫 /2021 年 高床の家

工学と美学の融合を目指すアーキニアリングという思いは、現代社会の多様化の中で、環境や建設、改修やものづくりにまで拡がります。このため、AND 賞の選考委員も多様になるでしょう。経験豊富な建築家として堀越委員に、構造設計にとどまらない幅広い活動をしている構造家の陶器委員、日本では貴重な建築批評家として磯委員に、若輩の建築家として福島、という 4 名で構成されています。

一次選考では、日本有数の大手建設会社から、若手の建築家や構造家まで、幅広い分野から 32 作品の応募を得ました。昨年度は 27 作品でしたので、今年度は少し増えたことになります。その中から、AND 賞の意義にふさわしい 10 作品が入賞として選ばれて、最終選考に進みました。

当日のプレゼンテーションは発表が 4 分、質疑応答が 6 分の計 10 分です。登壇者の皆さんの説明は木造、環境解析、コンピュテーションナルデザインなど、先端的で幅広いテーマが印象に残ります。

そうして、最優秀賞を決める選考が始まりました。例年通り、ここで 4 人の各選考委員がそれぞれの選考基準を明らかにしました。今年度のテーマは、堀越委員が「職人的なていねいさ」、磯委員が「技術が建築にどのように活かされているか」、陶器委員が「社会を変えるような物語」、福島が「つくることのデザイン」です。その後、1 人 4 票で投票を行いましたが、満票の作品はなく、3 票が 3 作品、2 票が 3 作品、1 票が 1 作品と、選考委員の票が散らばりました。それぞれの作品の特徴や規模が大きく異なるという、AND 賞の性格から想定内の流れです。次に、1 票以上を得た 7 作品に対して 1 人 1 票で 2 回目の投票を行い、3 票を獲得した『ラジアルアンプハウス』、『早稲田大学本庄高等学院体育館』、2 票を獲得した『I さんの避難観測所』、『学ぶ、学び舎』の 4 作品が最優秀賞の選考に進みました。

残った 4 作品には、1 分で追加アピールをしていただきました。その内容を加えて選考委員が 1 人 1 票の投票を行ったのですが、堀越委員と陶器委員が『学ぶ、学び舎』、磯委員と福島が『早稲田大学本庄高等学院体育館』を選んだことにより、ここで意見が 2 つに分かれてしまいました。

AND 賞では、毎年どこかでこのような緊張関係が発生します（笑）。もちろん、選考委員同士でさらに議論を重ねたのですが、『学ぶ、学び舎』、のコンピュータと手づくりが融合したようなものづくりと、『早稲田大学本庄高等学院体育館』のコンクリートダブルスキンによる即物性は、全く異なる特徴の素晴らしいところがみつかりません。ここで『学ぶ、学び舎』の秋吉さんから提案があり、『早稲田大学本庄高等学院体育館』の飯島さんも加わって選考委員と議論をすることになりました。それでも、議論をすればするほど 2 つの作品に優劣がつけがたく、最優秀が決まりません。その一方で、このとき AND 賞の選考で最も大切な「選考委員と登壇者の対話」がさらに深まったようにも感じたのです。私は静かに感動していました。

このため選考委員、登壇者、実行委員長へ確認をした上で、特例として『学ぶ、学び舎』と『早稲田大学本庄高等学院体育館』の 2 作品を最優秀賞とすることになりました。『ラジアルアンプハウス』と『I さんの避難観測所』の 2 作品が優秀賞です。最優秀が 2 つになってしまったのは、審査委員長の力不足です。しかし、『学ぶ、学び舎』の秋吉さんが第 2 回の最優秀に続く初めての重賞、『早稲田大学本庄高等学院体育館』が大手組織事務所として初めての最優秀賞と、この 2 つの「初めて」が今後の AND 賞の可能性をさらに発展させてくれたら、望外の喜びでもあります。

選考を終えて

AND 賞選考委員 磯 達雄



磯 達雄
ISO Tatsuo

1963 年埼玉県生まれ 1988 年名古屋大学工学部建築学科卒業後、日経 BP 社で雑誌「日経アーキテクチュア」の編集に携わる。2000 年独立、2002 年フリックスタジオ共同主宰、2020 年 Office Bunga 共同主宰。2001 年から桑沢デザイン研究所非常勤講師、2008 年から武蔵野美術大学非常勤講師を兼務。主な著作に『昭和モダン建築巡礼 西日本編／東日本編』(宮沢洋との共著、日経 BP 社刊)、『ポストモダン建築巡礼』(同)、『菊竹清訓巡礼』(同)、『ぼくらが夢見た未来都市』(五十嵐太郎との共著、PHP 研究所刊)など

AND 賞の選考委員を務めるのは 4 回目となる。アーキテクチュアとエンジニアリングの統合を評価しようというこの賞の性格上、当然なのだが、今回もさまざまな種類や規模の候補作が挙がった。それらの中には、現在、建築界に求められている社会的な課題に応えようとするものも少くなかった。

そうした意味でまず高い評価が与えらえるのは、『SHIMZ CYCLE UNIT』である。建設現場の仮設事務所を環境性に優れたものへ置き換えれば、建設業に与えるインパクトは大きい。工法も工夫されたものだったが、完成した事例の魅力が今ひとつ伝わってこなかつた点が残念だった。

コンピューターによるデザインと製作の統合も、今、盛んに取り組まれている課題だ。今回の候補作では、『TAC.T の輪』と『学ぶ、学び舎』がこれに正面から取り組んでいる。両者を比べると、前者が産み出したものが洗練された造作なのに対し、後者が生み出したのはコンクリートと木が融合した怪物である。構造として過剰にも思えるのだが、後者の方に自分はより惹き付けられた。

自然災害といかに向き合うかも、建築の大きな課題である。『Iさんの避難観測所』は、水害に個人で耐えることが目指されている。その解決策が 1 本脚の人工地盤で、大きさにも思える命名は嫌いではないのだが、1 本脚だからこそその上部構造もありえたのではないか、と考えてしまった。『一本足の家』も 1 本柱で支えられているが、こちらは陸屋根の住宅。果敢な挑戦には敬意を表したいけれども、それにこだわる理由に納得がいかなかつた。

活用促進が図られている CLT を扱ったのが『Hair room TOARU』と『警固竹友寮』だ。前者はスラブに、後者は壁に、これを用いている。前者の内観は、RC の壁柱と美容院の鏡を一体化させ、内外の境界を消失させてしまったかのようで目を引く。しかし、風が抜ける通り土間を各階の寮室に面した後者の方が、CLT の活かし方という面で長じていると感じられた。

材料工法への問題意識は『早稲田大学本庄高等学院体育館』にも強く見られる。ここではダブルスキンという環境技術を組み合わせることで、コンクリート打ち放しというレガシーな工法の復権が図られている。

残りの 2 作、『ラジアルアンプハウス』と『屋外回廊わっか』は、課題の社会的意義ではなく、その解決法に鮮やかな冴えを見せている作品と言える。前者は、建物が密集する市街地の住宅に庭を楽しむ空間が、芸術的な架構によって実現している。後者は木と鉄骨を組み合わせて、軽やかな回廊の屋根をつくった。いずれも洗練されたデザインで、求められた建築空間を達成している。

これら 10 作品を比較して、優劣を付けるのは、例によってたいへん難しかったのだが、そこは総合的な判断で選ぶことにした。敢えて重きを置いたポイントを挙げるなら、達成されたデザインの統合がその作品として完結するのではなく、社会に広く影響を与えるかどうか、とした可能性を孕むものをより選んでいこうと考えた。

この観点から、最後まで強く推したのが『早稲田大学本庄高等学院体育館』である。コンクリート打ち放しという 20 世紀の技術を、21 世紀につなげて広げようとした作品であり、その裏にはコンクリートにこだわる設計者の執念が感じられる。また『学ぶ、学び舎』も、新しい技術で建築が変わのだという信念が形となって現れたもので、その強い気持ちを評価する。

この 2 作は甲乙つけ難く、選考委員会は最優秀として両者を選ぶことになった。今回は仕方がないが、あくまでも例外的な措置としたい。次回以降は 1 作に絞るべきと考える。

AND 賞選考委員 陶器 浩一



陶器 浩一
TOKI Hirokazu

1962 年生まれ。1986 年京都大学大学院修了。1986 ~ 2003 年日建設計。2003 年滋賀県立大学助教授 2006 年教授、現在に至る。

主な作品：キーエンス本社研究所ビル、愛媛県歴史文化博物館、愛媛県美術館、梅田ダイビル、兵庫県芸術文化センター、積層の家、清里アートギャラリー、澄心寺庫裏、海光の家、半居、福良港津波防災ステーション、竹の会所、さとうみステーション、クアパーク長湯など。

受賞：JSCE 賞、Outstanding Structure Award (IABSE)、松井源吾賞、日本建築学会賞(技術)、日本建築大賞、日本建築学会作品選奨など

4 回目の AND 賞選考委員を仰せつかりました。今年もバラエティに富んだ意欲的な 32 作品の応募がありましたが、例年その評価軸に頭を悩まされます。単に出来上がった作品の美的評価だけでなく、エンジニアリングの先進性や有用性だけでなく、AND 賞として見るべき評価軸は何か？ その定義も定められるものではありませんが、今年は「ものがたり」と「想い」の 2 点を軸に作品を拝見しました。

一つ目の「ものがたり」ですが、作品を生み出すまでのエンジニアとアーキテクト、設計者と施工者、建築と社会、作品が出来るまでのプロセスで、お互いを高めあいながら作品が昇華してゆくプロセス、あるいは出来上がった作品を舞台として起こる“ものがたり”を大切にしたいと思いました。

二つ目の「想い」は、如何に真摯に作品に向き合っているか、すなわち、作品に設計者の想いがどれだけ込められているかという点で、込められた想いは出来上がった空間に表れていると思います。特に今年の応募作にはそれを感じるものが多く、決して派手でなく一見さりげないものでも肩に力を入れない静かな思いが伝わってくるものもあれば、あるいは逆に力が入りすぎているけれど熱い思いが伝わってくるものもあり、いずれもその純粋な想いに好感が持てました。

一回目の投票では、『Hair room TOARU 「建物の活動要素や今昔の風景、素材構法、環境性能、モノコトを建築的に組み替え、多層的に混生する』、『ラジアルアンプハウス「空間に寄与する工芸的架構』、『I さんの避難観測所—危機への備えと遊びのための鋼製小規模人工土地ー』、『木と鉄骨のレシプロカル格子梁と円環状縁梁による屋外回廊「わっかい』、の作品に投票しました。一つ目は、全面鏡を貼り付けた RC 壁をずらせながら配置し、CLT の屋根をかけ渡したヘアサロンで、適材適所の素材選定で防耐火要件を満たしつつ、シンプルな構成で特徴ある空間をつくっています。二つ目は、40 本の垂木による方形の空間が特徴的で、特殊な技術に頼ることなく伝統的な工法を応用しつつ、その細かなディテールへのこだわりに設計者の強い想いを感じました。三つ目は、氾濫危険地域に建つ住宅の避難スペースの増築で、鋼製ラチス柱と鋼製ラチスの片持ち梁で構成した小さな人工大地で小屋を浮かせています。この特徴的なかたちが災害に対する安心感を与え、この建物を見ることで周辺住民もこの地域の災害危険性を再認識し、市民レベルで防災意識がまちに展開してゆく可能性を感じました。4 つ目は、2 つの道の駅を連結する大きな広場を囲うように設けられた屋外回遊路で、人々の活動を妨げないようにφ114.3mm の鋼管柱の上に架けられたスパン 1.2m の格子梁の屋根は、柱同士をつなぐ 120mm 角型鋼管の間を 120mm 角の木格子梁をレシプロカル構造で架けています。木と鉄を適材適所に組み合わせて用いることにより、すべて外形が統一されたシンプルな架構を実現しており、特別な技術や特殊な部材を用いることなく、さりげなくシャープな架構を実現していることに好感が持てました。

いずれもそのタイトルから作者の作品への強い想いが伝わってきました。

最終投票で得票を得た 2 作品は全く異なる評価点をもつもので選考は難航を極めました。『環境を制御するコンクリートダブルスキンー早稲田大学本庄高等学院体育館ー』は、RC 打ち放しの特徴的な外観が目を引きますが、コンクリートダブルスキンによる多機能な環境制御手法とその空間は、総合事務所らしい完成度の高さを感じました。『学ぶ、学び舎』は、その形態が最初恣意的に見えましたが、その空間が新たな行動を誘発するという建築の初元的な意味を感じ、また、CLT 型枠 RC 構造という素材の適材適所な選定への普遍性を感じました。

結局これら 2 作品に甲乙つけることが出来ず最優秀が 2 作品となり今後への課題も残しましたが、まさに多様な評価軸を持つ AND 賞らしい決着となつともいえます。

AND 賞選考委員 堀越 英嗣



堀越 英嗣
HORIKOSHI Hidetsugu

1953年東京生まれ 1976年 東京藝術大学美術学部建築科卒業、1978年同大学院修了後、丹下健三・都市・建築設計研究所にて東京都庁舎競技設計最優秀案、パリ、イタリア広場、SINGAPORE, MARINA SOUTH、旧赤坂プリンスホテル、横浜美術館等担当 1986年アーキテクトファイブ共同主宰、モエレ沼公園（イサム・ノグチと共同）、とつり花回廊、新潟駅舎駅前広場等、2005年堀越英嗣 ARCHITECT 5 設立、五島美術館改修、正願寺等、日本建築学会賞（業績）、同作品選奨、グッドデザイン大賞、BCS賞等共同受賞、2001年鳥取環境大学教授、2004年芝浦工業大学教授、2017年建築学部長、現在 芝浦工業大学名誉教授

今年で四回目となった AND 賞であるが、「技術を持って統合する」という理念で建築及び周辺技術を見直すことで、これまで評価されにくかったが、実は大切な試みを見出そうという賞である。基準に関しては今回も最終選考においては初めに選考委員が自らの選考基準を話すことで、多様な視点での選考であることを表明している。

応募作品も家具から大きな建築まで現代の先端的で多様な建築・技術の応募が揃ってきたことは賞への理解が定着し始めたような気がする。

応募作品は全体的には木造の技術の多様な展開に加えて社会的なテーマ、災害、耐震改修、リノベーションなど、現代の日本の建築の状況を反映していることはこの賞にふさわしい内容である。

もちろん現代の要求に対して真っ直ぐに「完成」されている建築作品もあったが、AND 賞としては、それに加え、ある意味で要求された範囲を逸脱した新しい可能性の提案を積極的に評価したいと考えており、その萌芽が見られるのが最終選考に進んだ 10 作品である。

10 作品の中で優秀賞には至らなかったが、『木と鉄骨のレシプロカル格子梁と円環状縁梁による屋外回廊「わっか!」』は 1 回目の投票では票を入れていたが、残念ながら最終投票には残らなかった。軽快な外部の庇の「わっか!」の形態とレシプロカル構造との意外な整合性はワクワクする可能性を感じた。機能的には少し高すぎる部分が気にはなったが、優秀賞に値する作品であると思う。『SHIMIZ CYCLE UNIT』はリサイクル可能な木造で、過酷な建設現場に安らぎを与える「みんなの仕事場」であり、これから建設現場の標準となってほしい。『ラジアルアンプハウス「空間に寄与する工芸的架構!』は個人住宅であるが社会に対して美しい架構の天井を「見せる」という配置の考えに共鳴する。閉じがちな個人住宅を、「見る見られる関係」にすることで、住人と地域社会の人が自然に仲間として緩やかにつながるきっかけを建築がもたらしている。そして見せる方形の垂木屋根の美しい工芸的な架構は日本の優れた大工の技術を活かしており、日本の伝統技術の継承という意味においても貴重である。近年エンジニアリングウッドと金物の「木造」が多く試みられているが、このような「職人的技術が生み出す空気感」はいかに AI 技術が合理性を追求しても到達できない宝であると思う。Hair Room TOARU は CLT を水平なスラブに垂直要素を RC の壁によるランダムな構成で、植栽と合わせて様々な居場所を作り出す論理的明快さを持つ楽しい建築である。欲を言えば環境調整を取り入れたり、屋根の水の道を植栽に生かすなど、エコロジカルな建築となる可能性を持つ作品である。

『環境を制御するコンクリートダブルスキンー早稲田大学本庄高等学院体育館ー』は既に様々に発展しているコンクリートの可能性をさらに追求した意欲的な作品である。RC のダブルスキンの構造を生かした機能や環境制御と一体化しつつ、すべて RC で仕上げるという総合的技術を駆使して完成させた「職人技的仕事」である。極めてストイックな空間で、果たして高校生の体育館としては閉じすぎではないかとの疑問もあるが、徹底した空間はその疑問にも搖るがない信念を感じた清々しい労作であり最優秀賞にふさわしい。もう一つの最優秀賞である『学ぶ、学び舎』は個別に講評しているので詳細は触れないが、この「合理性の近傍にある」構造は合理性、経済性だけを追求した建築にはない「オリジナル」という建築の「原初」(ORIGIN) にある魅力を持っており、それをエンジニアと建築家が四つに組んでどちらも引かない凝縮した建築の形は、これから建築のあり方に一石を投じている。こちらも最優秀にふさわしい提案であり、今回一つに絞れない程の異なった二つの作品を選べたことは、実は喜びの方が大きいかも知れない。

最優秀賞 学ぶ、学び舎

応募代表者：秋吉 浩気 (VUILD)

共同応募者：佐藤 淳、末廣 康介、下田 悠太 (佐藤淳構造設計事務所)

本田 幾久世 (元 佐藤淳構造設計事務所)、佐々木 君吉 (アトリエ海)

中澤 宏行、篠原 岳、伊勢坊 健太、花田 康史、小西 陽二、野田 慎治 (VUILD)

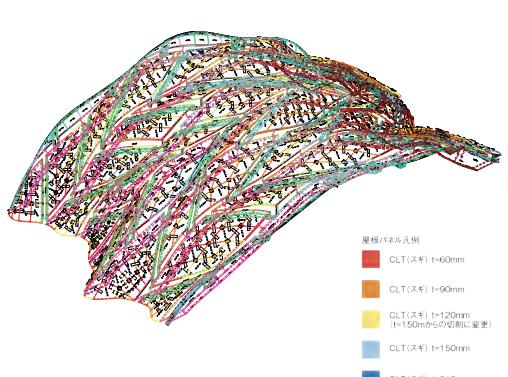
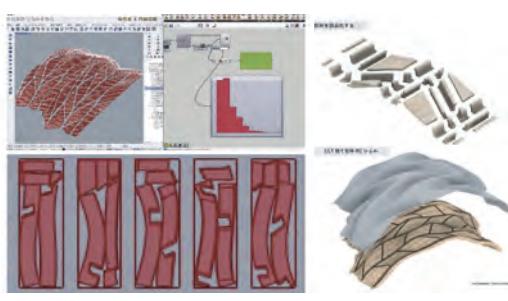


【応募理由】応募の動機はシンプルで、施工を引き受けてくれたアトリエ海の佐々木さんと、構造を担当してくれた佐藤淳さんの2社に賞を贈るためだ。特に佐藤さんは、第2回AND賞の最優秀賞を競い合った仲であり、受賞の嬉しさよりも奪ってしまった後ろめたさが優っていた。翌週の打ち合わせで「敵や敵」と冗談で言われたのを覚えているが、なんやかんや悔しかったのだろうと思った。今回応募すると伝えた時も「絶対獲れん。2回もVUILDにとらせる訳ないやろ」と言われたが、無理と言われると奮起したくなる。有難いことに結果として最優秀賞を頂けることになったが、今回も嬉しさよりも安堵の方が大きかった。奪ったものをようやく返すことができたヨと。今現在も3社で石垣島のプロジェクトに取り組んでいる最中だが、御二方のお陰でなんとか前進できている。佐々木さん佐藤さんいつもありがとう！そしておめでとう！！（秋吉）



自社工場で作成されたモックアップ

プレカットされた型枠部材を現場で組む



【講評】この施設はこれまでの大学という「教育」機関にある、用途が想定された機能を満たすための建築ではなく、創造性と協働を促すという機能を誘発する建築である。この講評ではあえて技術的な解決のプロセスを後追いでは解説はしないが、この建築がこれからの社会から求められる意義について述べる。

嘗てエドワルド・トロハは「構造の（誠実さ）は必ずしも作品の不可欠な属性ではない。古来の優れた作品を見ると、美しくあるためには强度上の要求に最も合致した形態に従わねばならない、とまでは考えていないことがわかる」すなわち「構造の美しさは合理性の近傍にある」（坪井善昭）と言える。

この建築は、必要なスパンを最適な構造でつくるという従来の合理主義では生まれない、「機能を誘発する機能」を持つ建築であると理解することが必要である。今、コンピューターの発達により、どのような形態も構造計算可能で最適解に辿りつける時代である。その結果、合理的ではあるが退屈な建築が大量に生まれ、あるいは恣意的で変わった形態が可能になった「なんでもあり」の時代と言われている。しかし、機能が形になるのではなく、形態が利用者の行動を誘発するというアフォーダンスを与えることは昔も今も変わらない建築の重要な側面である。

この「建築」はガウディが語っていた建築の原初（ORIGIN）の意味でのオリジナルな「構造としての空間」がある建築である。その意味でAND賞最優秀賞に相応しい建築である。（堀越）

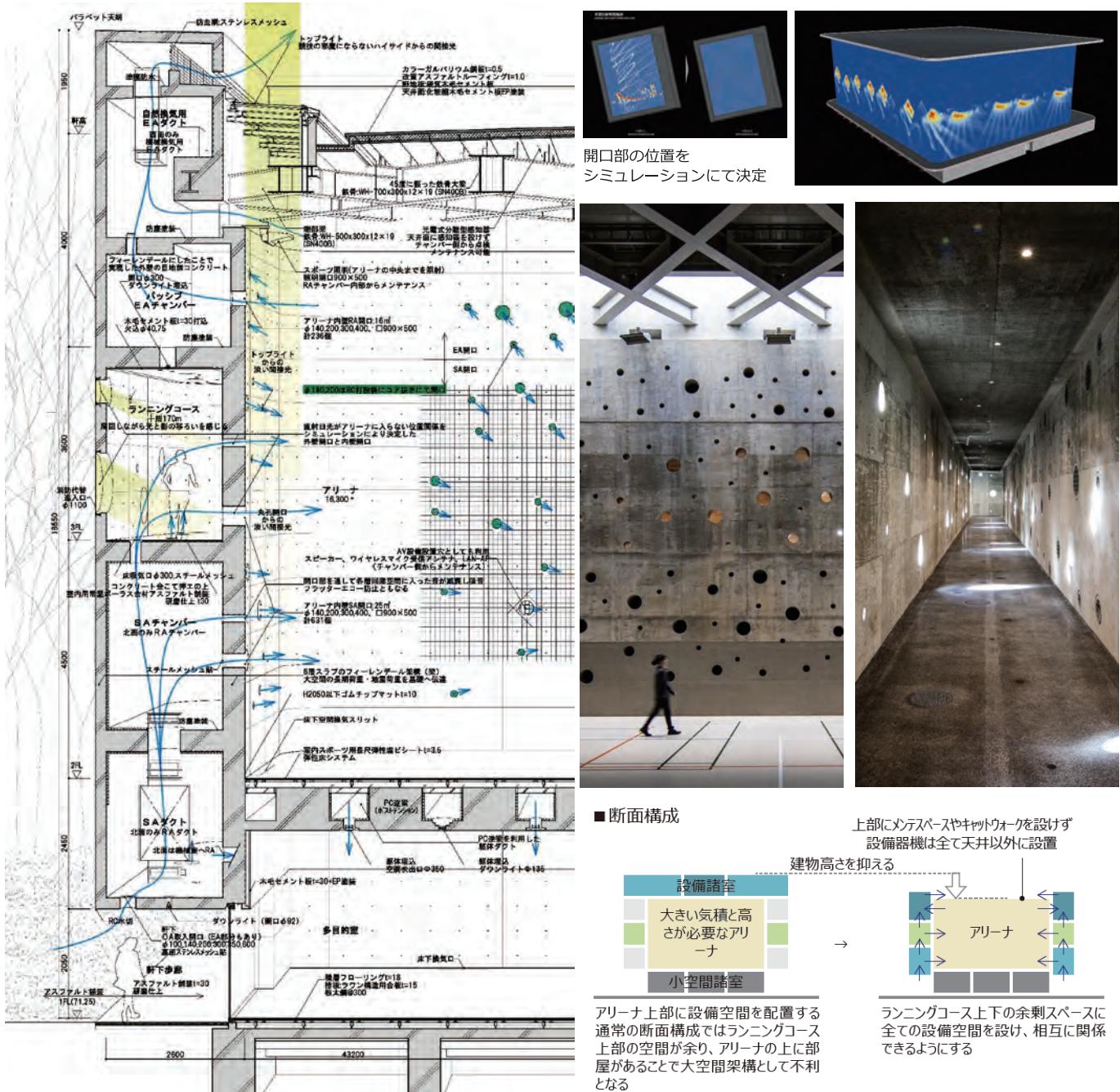
最優秀賞

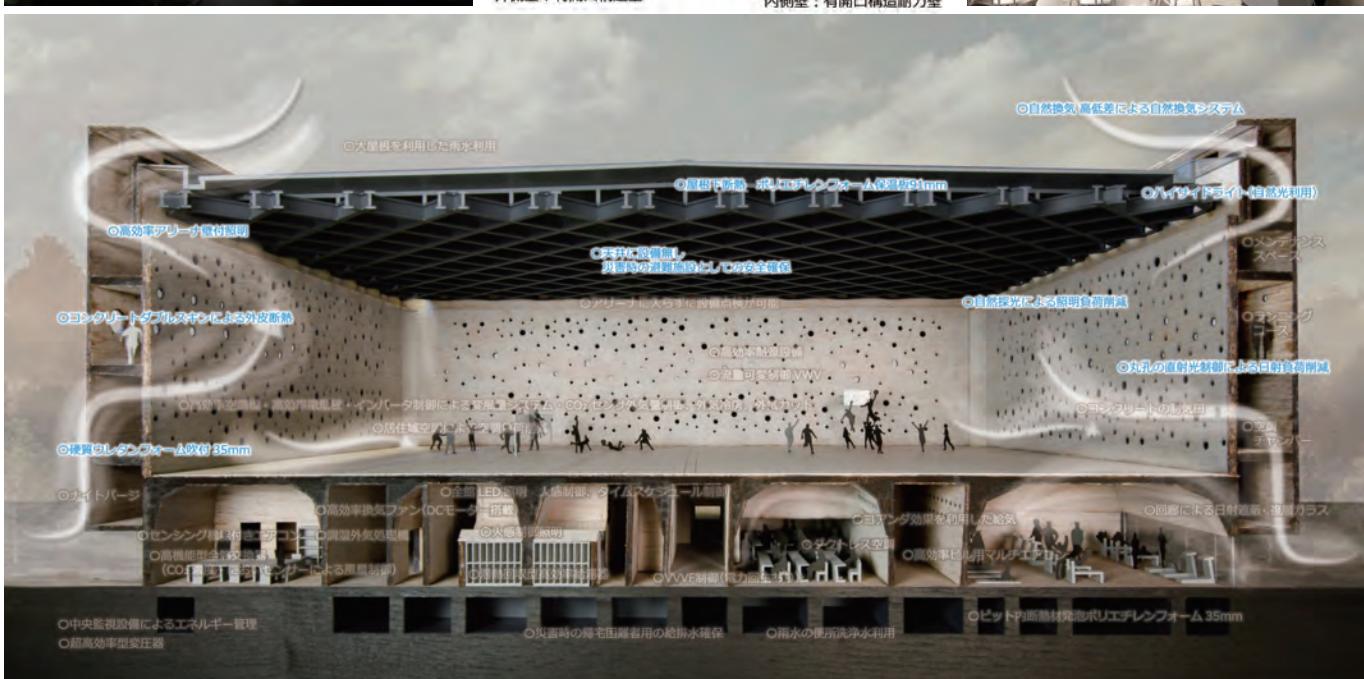
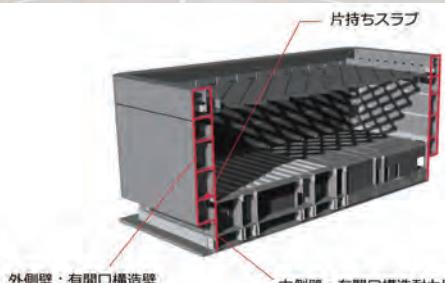
環境を制御するコンクリートダブルスキン －早稲田大学本庄高等学院体育館－

応募代表者：黒川 巧（日建設計）

共同応募者：飯島 敦義（IOII architects／元日建設計）、平田 裕信（日建設計）

【応募理由】山ひとつが校地という大自然の中に建つ高校体育館のプロジェクトである。学校の体育館ならではの特徴であるが、体育や部活での利用のほか、式典、さらには災害時の避難場所としての機能までも求められた。メインアリーナを構成するコンクリートダブルスキンは、上下左右に丸孔開口を有し、空気、熱、光、音、人がダブルスキン内部を巡りながら、アリーナの環境を制御する。空調、照明、スピーカーなどの必要な設備機能をアリーナ外周の回廊に集約することで、天井部は構造躯体表しのみの大空間とし、地震時の落下物の危険性が無い、安心・安全なアリーナとした。こうした総合技術により、コンクリート建築のさらなる可能性を清貧な美の中に追求する姿勢は、建築デザインと構造・環境設備などのエンジニアリングを融合させ、ANDの理念に連なると考え応募した。（黒川、飯島、平田）





【講評】矩形平面を採る体育館の全周を、コンクリートのダブルスキンが取り囲む。コンクリート壁は蓄熱体となり、その間は断熱層として効くだけでなく、空調や自然換気のチャンバーとしても機能する。同時にここは雨天時のランニングコースとしても使われる。壁には丸い穴が散りばめられ、そこを通して光、空気、音が入り出す。ガラスの開口はほとんどなく、コンクリート打ち放しの壁で内外をつくり上げた姿は、現代建築としては異様に映るだろう。けれどもさかのぼれば、コンクリート打ち放しを大胆に採り入れた、いわゆるブルータリズムの建築が世界を席巻した時代もあった。普及した背景には、高度な技術や特殊な材料に頼らなくても自由に建設がてくれるという、この工法の特性がある。1960年代をピークとしてブルータリズムは廃れ、その後はガラスやアルミなどを多用した、薄く、軽く、透明なデザインの建築に大勢は流れしていく。そうした中で現れたこの建築は、コンクリート打ち放しという“伝統建築”的手法を使いながら、現代に求められる環境性能の達成を図り、乾燥収縮ひび割れといったコンクリートの問題の解決にもしっかりと取り組んでいる。コンクリート建築の復興を、高らかにうたった建物だ。（磯）

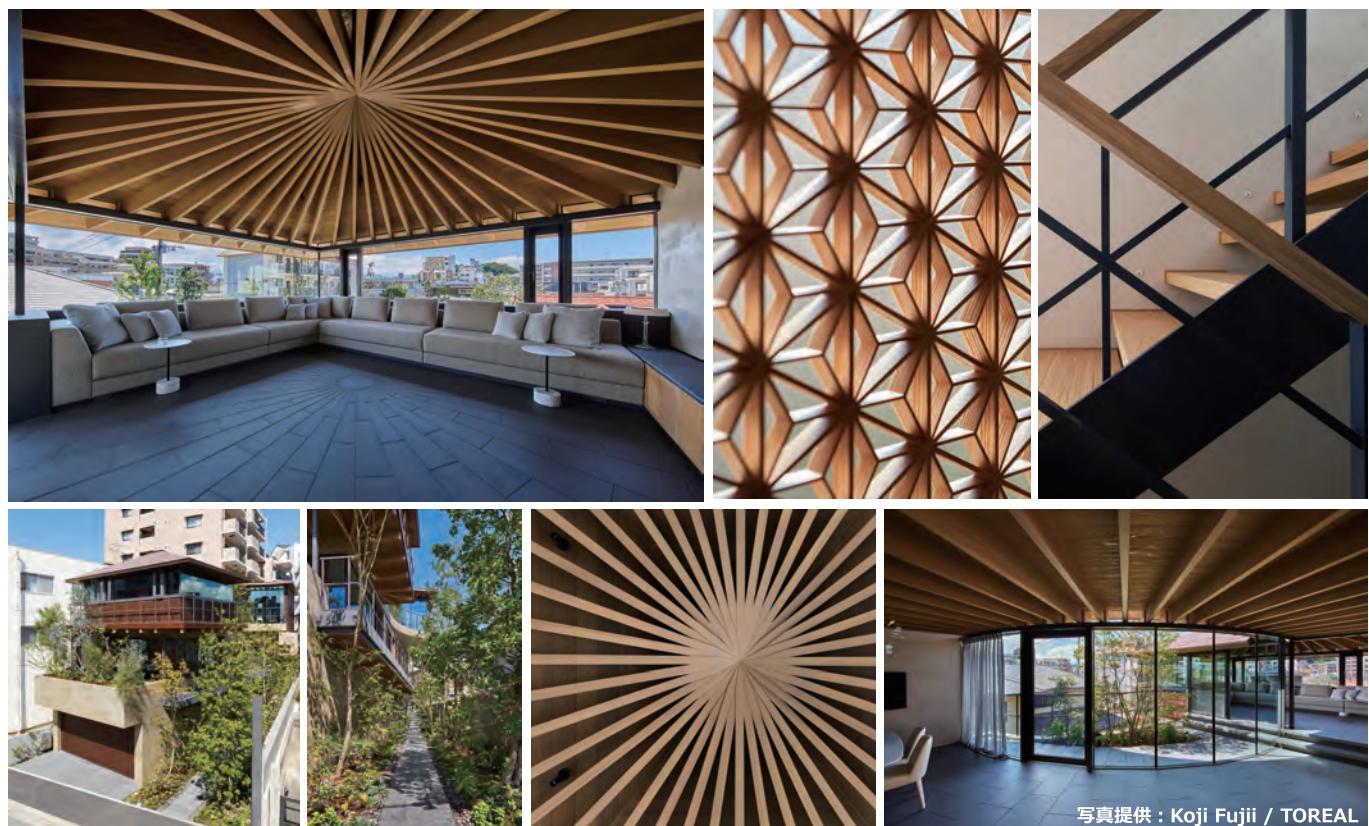
優秀賞

ラジアルアンプハウス 「空間に寄与する工芸的架構」

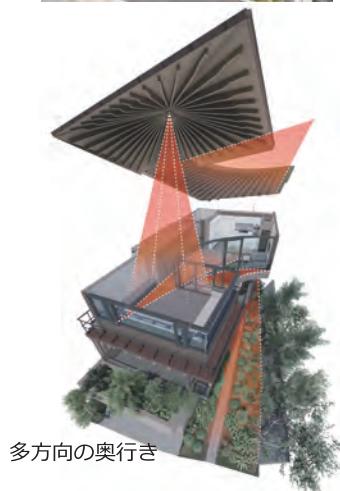
応募代表者：谷口 幸平 (and to 建築設計事務所)

共同応募者：山田 憲明 (山田憲明構造設計事務所)

【応募理由】再開発が進む市街地において、環境と共に建築を考え、建築の境界のその先へ意識を向ける事で実際の空間以上の豊かさを得る事を試みました。深いアプローチを意図した配置と、内外が双方に奥行をつくる扇状の平面計画。構造も同様に、片流れの架構は消失点を街に向け、建築や庭、敷地を越えて意識を外部へ拡張します。一点に集束する方形屋根の垂木は、無限遠のごとく遙か上空へと意識が向かいます。地域の伝統産業でもある大川組子から着想を得て、独自の美しい架構を実現しました。一つの思想が一貫性を持って空間に寄与し、このような試みが個人邸で実現できた事に意味があります。街ゆく人々が立ち止まり、架構を見上げる事を嬉しく思いました。一般の方々が構造を美しいと感じ、共感してもらえる事は、AND 賞の理念を広く知ってもらうため、意義があると感じ応募をさせて頂きました。(谷口)



写真提供 : Koji Fujii / TOREAL



【講評】敷地は再開発が進む市街地にあることから、周辺環境は谷底のようになってしまふため、南側に細長い庭をとって日照を確保し、アプローチに奥行を与えている。緑豊かな庭を通ってエントランスに入る配置計画が気持ちよさそうだ。断面計画は流動的に上下階がつながるように考えられていて、ダイニングの片流れ屋根とリビングの方形屋根の木架構が目に留まる。特に、地元産業の組子細工を参照したという方形屋根は、40 本の垂木が扇状に頂部で一点に集まり、神聖ともいえる上昇感を獲得している。40 本の垂木は 2 層構成になっていて、隣り合う部材が上下から挟みこまれることにより、一点に集まる接合部を特別な金物を用いないで実現している。桁との接合部も、枠なしでガラスが納まるように細心の注意が払われている。構造がそのまま意匠となるため即物的で美しく、つくる過程に逃げがないから背筋が正されるような緊張感が生まれている。さらに、組子細工という伝統工芸を現代の建築のデザインに参考することは、何かの理由で忘れ去られた宝物を取り戻す冒險のようだ。歴史から建築のデザインを問う視座は、新しさを求める現代にこそ重要になるだろう。(福島)

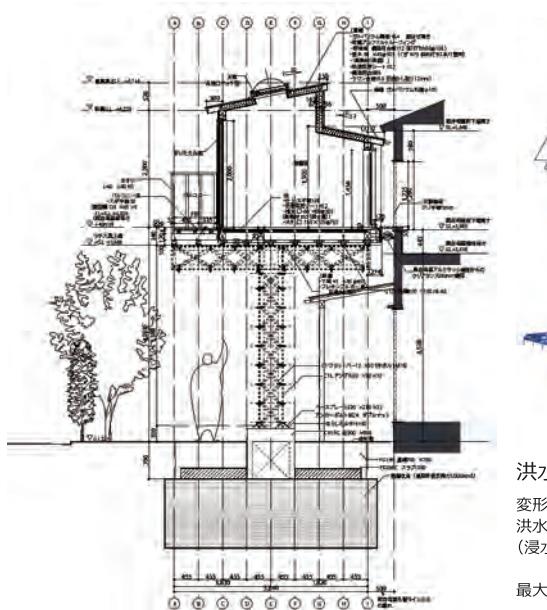
優秀賞

Iさんの避難観測所 —危機への備えと遊びのための鋼製小規模人工土地—

応募代表者：古市 渉平（佐藤淳構造設計事務所）

共同応募者：増井 真也（ますいいリビングカンパニー）、佐藤 研吾（コロガロウ／佐藤研吾建築設計事務所）

【応募理由】敷地は埼玉県荒川流域。洪水時の避難ためのごく小さな増築である。施主は家庭の事情から敷地内に避難場所を求めたが、一般に洪水時の避難率は低く、また避難中や避難先での被災の可能性もあり、個人がいかに対策するかは普遍的かつ難しい課題である。本計画では危機への備えの対極にある「遊び」の空間と重ね合わせることで、建築によるアプローチを試みた。歴史的には「水屋・水塚」という素朴なアーキニアリング・デザインが生まれた土地であり、その流れに連なるものとしてラチス状の鋼製人工土地とその上の木造小屋という形式を生み出すことができた。市井の技術による自由度の高い形式は個にとどまらず、防災意識とともに街へと展開し、この街の風景となっていくかもしれない。（古市、佐藤）



洪水時の構造検討
変形角 : 1/600 (50倍拡大表示)
洪水の氾濫流荷重 : 15 kN/m²
(浸水深 : 3m、流速 : 5m/s、
抗力係数 : 1.2)
最大接地圧 : 25 kN/m²



写真提供 : comuramai

【講評】荒川流域の市街地に建つ住宅の増築である。自治体が定めるハザードマップによれば、荒川が氾濫した場合この地域は3mを超える浸水の危険性がある。居住者には同居する高齢の家族があり、万一の災害時に自宅敷地内に避難が出来る居場所が求められた。その要求に対し設計者たちは、地上4mに小さな木造の小屋を設けることを提案した。小屋は既存母屋2階部分から車椅子でも侵入できるように計画され、日常時は居住者の趣味のために使われている。小屋を支える人工大地は、小さな中庭の真ん中に鋼製ラチス柱を立て、そこから鋼製ラチスの片持ち梁を出すことで構成されている。

建物を支える鋼製ラチスフレームは、L形鋼と平鋼で構成した450mm角の断面をしている。最小限の接地面積としたことで、中庭スペースを大きく妨げることなく、また、浸水による水圧も最小限に抑えることができる。何よりも、この特徴的なかたちが災害に対する安心感を与えている。最近大きな災害が続いているが、行政のみに頼るのではなく、この建物をすることで周辺住民もこの地域の災害危険性を再認識し、市民レベルで防災意識がまちに展開してゆく可能性を感じる。（陶器）

入賞

Hair room TOARU

建物の活動要素や今昔の風景、素材構法、環境性能、モノコトを建築的に組替え、多層的に混成する

応募代表者：関口 貴人（関口貴人建築設計事務所）

共同応募者：萬田 隆（tmsd 萬田隆構造設計事務所）、西野 祐介（元 tmsd 萬田隆構造設計事務所／西野建築構造）

新井 和勝（新明工産）



【講評】関東周辺のロードサイドに建つ美容院である。一見すると、床と壁だけが離散配置された、板によるミニマルな立体構成が印象に残る。同時に、その内部空間は美容室の機能に配慮した多様な空間になっていて、その水平方向のつながりは外部まで拡がっていくようだ。壁は RC、床は CLT と要求される機能に応じて材料を使い分け、接合部はまるで接着剤でくっつけたみたいにディテールが消されている。それは、何も見えないようにするために、壁内の配筋まで慎重に設計しているからこそミニマルさだ。設計者の意志は、ロードサイドのおだやかなシンボルとしてバランスよく現れている。このおだやかさとバランスのよさの先に、さらなる建築の強さを期待したい。（福島）



入賞

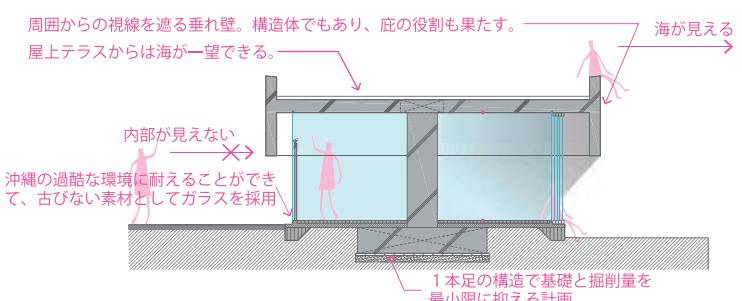
一本足の家

応募代表者：五十嵐 理人（IGArchitects）

共同応募者：三崎 洋輔（EQSD 一級建築士事務所）



【講評】最初にこの計画を見たときにまず沖縄の家であることに驚かされた、沖縄の家は台風が多いため、堅牢な RC の箱型の建築を思い浮かべるからである。この計画はそれを「裏切る」挑戦的なデザインである。ただ沖縄の伝統的な民家の深い軒の屋根のような「守られた」居場所をこの家は RC の巨大なキャンチレバーで作り出していることに驚くが風除けの扉がないのは気になる。特徴的なのは、深く垂れ下がった軒の壁と全面的に開け放てる引き戸がより一層守られた居場所を内部に作り出していることである。気になったのは一本足の矩形の柱が、主な構造であるが、サブの柱が隠されていること、水回りの配置に工夫が欲しかったことである。沖縄の建築の新たな挑戦として入賞にふさわしい計画であるといえよう。（堀越）



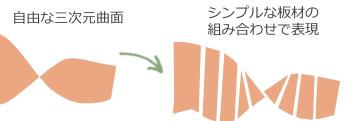
入賞

TAC.T の輪

応募代表者：岡山 真之介（大成建設一級建築士事務所）

共同応募者：鈴木 あゆみ、野口 裕介、溝渕 知己、土井 健史、江森 健人、木村 みどり（大成建設一級建築士事務所）
森田 仁彦、安田 聰、相馬 智明（大成建設）

【講評】この計画は寝殿造りの空間に人の居場所として作られた「設え」と同様のサブシステムの現代建築版である。見慣れたソファーではなく座っても大丈夫なものなのか、壊れないのかという疑心暗鬼が逆に人をアフォードする形態の力を現代の先端的技術で実現している。植物の生存のための構造的合理性から生まれる「複雑な形態」に近づけようとの試みは理解できるが、やはり植物の生き延びるためのデザインの持つ生命の力強さには及ばないことも事実である。しかし「何が可能か」という構造的挑戦から何かが生まれることもある。最終的なオーガニックなところまでは遠い道のりとは思うが、まずは最先端の技術を使った第一歩であり、今後、思わぬ方向への応用に向かう可能性も含めて重要な試みであり AND 賞入賞にふさわしいデザインである。（堀越）



入賞

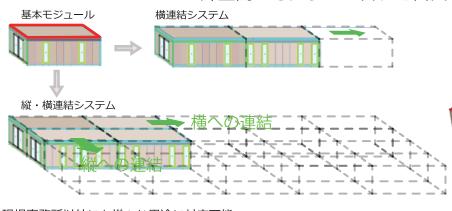
SHIMZ CYCLE UNIT (シミズ サイクル ユニット)

応募代表者：山田 徹（清水建設）

共同応募者：菊田 大典、加藤 ひかる、島田 大偉、貞広 修、谷口 尚範、佐藤 彰、吉田 郁夫、和田 昌樹、
井手 勇人（清水建設）、小野塚 真規（株式会社オノツカ）

【講評】日本有数の大手建設会社による、仮設建築の提案だ。多くの仮設建築で採用されている鉄骨プレハブ造を木造に置き換えて、林業の活性化や建設時のエネルギー消費量や CO2 排出量の削減を目指している。材料は一般に流通している木材と CLT であり、それらを束ねることを基本としている。接合部にスプリットリングとボルトを用いたドライジョイントを採用しているため、組立と解体が容易であり他機能や他敷地への転用をうながしてくれる。計画の初期から施工者も参加しており、ていねいな現実性に好感を持った。環境問題に対してもタイムリーな提案である。一方で、現代社会の上意下達的なテーマを小さな建築に詰め込んだように見える。わたしがひねくれているからだろうか。（福島）

■モジュールシステム：基本モジュールの連結により、様々なプランに対応可能
外壁開口もプランに合わせ自由に構成可能



建設現場の仮設事務所の例



入賞

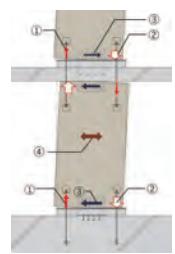
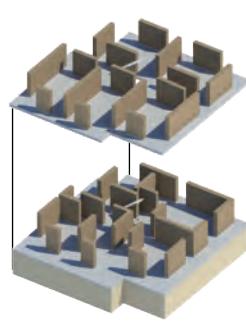
警固竹友寮

～立体的にまちと繋がる「通り土間」のある住まいを実現する

ハイブリッド木造～

応募代表者：田原 桂太（竹中工務店九州一級建築士事務所）

共同応募者：澤井 祥晃（竹中工務店大阪一級建築士事務所）、高山 淳二、木下 美佳（竹中工務店九州一級建築士事務所）



CLT 壁の水平力抵抗機構
①引きボルトによる引張抵抗
②CLT 壁による支圧抵抗
③ドリフトピンによるせん断抵抗
④CLT 壁によるせん断抵抗

【講評】都心部に位置する5階建ての社員寮である。すべての寮室に面して、風が抜ける通り土間を設けており、これにより暑い季節でも、引き戸を開け放てば空調を使わずに、快適な室内環境を得ることが可能になっている。同時に、それぞれの寮室から街が身近に感じられるしつらえともなっており、建物全体を見ると、積層する人工地盤の上に長屋が並んでいるような感じもある。これを実現したのが、RCのフラットスラブと、燃えしろ層と燃え止まり層を組み合わせたCLT耐力壁による構造。梁が不要でシンプルな躯体が、自由でおおらかな平面計画を可能にした。CLTという材料が都心居住のスタイルを変える、そんな可能性を開いた作品だ。（磯）

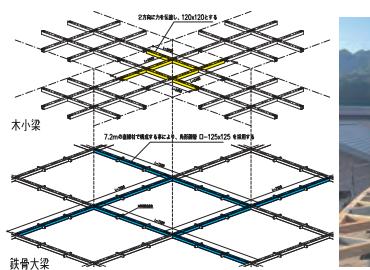
入賞

木と鉄骨のレシプロカル格子梁と円環状縁梁による屋外回廊「わつか」

応募代表者：三原 悠子（Graph Studio）

共同応募者：遠藤 克彦（遠藤克彦建築研究所）、樋口 永（遠藤克彦建築研究所）

小林 佐絵子（アトリエコ）、塩崎 太伸（アトリエコ・東京工業大学）



【講評】千葉県郊外の道の駅拡張に伴い、2つの施設を連結する大きな広場を囲うように設けられた屋外回遊路である。風景と調和させながら人々の活動を循環させるように、おおらかな自由な円環状の回廊は、活動を妨げないように最小限の部材で構成されている。高さが2.7m～5.7mと傾いた円形屋根はφ114.3mmの鋼管柱で支持され、最小限のバックスティをとることで水平剛性を調節している。屋根はスパン1.2mの格子梁として、柱同士をつなぐ120mm角型鋼管の間を120mm角の木格子梁を架けて、2方向支持とするためレシプロカル構造とし、回廊両端の縁梁により全体の面剛性を確保している。木と鉄を適材適所に組み合わせて用いることにより、すべて120mm角で外形が統一されたシンプルな架構を合理的に実現している。特別な技術や特殊な部材を用いることなく、肩に力を入れず、さりげなくシャープな架構を実現していることに好感が持てる（陶器）

第4回 AND賞 スケジュール

2023/09/10 応募要項公開
 2023/10/10 募集開始
 2023/12/07 応募締め切り
 2023/12/16 一次選考会
 2023/12/23 一次選考通過者発表
 2024/02/03 最終選考会
 2024/02/22 表彰式及び受賞講演会

第4回AND賞最終選考会・タイムライン
 司会：内海彩
 14:30 開会
 14:30 挨拶（斎藤実行委員長）
 14:34 選考委員紹介
 14:36 挨拶（福島選考委員長）
 14:40 プレゼン（4分）+質疑応答（6分）×5組
 15:30 休憩
 15:50 プレゼン（4分）+質疑応答（6分）×5組
 16:40 休憩
 17:00 最終選考（10作品→4作品）
 17:20 休憩
 17:35 最終プレゼン（1分）
 17:40 最終選考（最優秀選考）
 18:00 結果発表（福島選考委員長）
 18:05 挨拶（斎藤実行委員長）
 18:00 閉会

一次選考会 (A-Forum)



最終選考会 (日大 CST ホール)



プレゼン

集合写真

表彰式・受賞記念講演会 (A-Forum)



集合写真

受賞記念講演

賞牌・賞状

表彰式



学ぶ、学び舎

環境を制御するコンクリートダブルスキン
－早稲田大学本庄高等学院体育館－



ラジアルアンプハウス－空間に寄与する工芸的架構－

Iさんの避難観測所
－危機への備えと遊びのための鋼製小規模人工土地－

第5回 AND賞 2024 (予定)

募集要項は第4回に準ずる。
 但し応募作品の対象は2019年1月1日より2024年9月末までに完成した作品とする。

【日程】

募集要項発表	2024年9月初旬
応募締切	2024年12月初旬
一次選考	2024年12月中旬
最終選考	2025年2月初旬
表彰・講演	2025年2月中旬

第4回 AND 賞募集要項

応募作品の対象

2018年1月1日より2023年9月末日までに完成した国内作品、あるいは国内在住の設計者等による海外作品とする。

応募資格

- 個人（複数名も可）による応募とし、重賞も可とする。複数名で応募の場合は、それぞれの応募者が応募業績にどう関与したかを応募シートに明記する。
- 一次選考を通過した場合、最終選考会（2024年2月3日（土））に参加し、プレゼンテーションを行う。

提出物

- ①応募シート（A4 1枚）応募シート

※応募作品の完成年月を明記してください。

- ②プレゼンテーションシート（A3 1枚）※形式自由

※①のエクセルデータおよび②のPDFデータ（20MB以内）を提出先までE-mailにて送付してください。

※②のPDFデータが20MBを超える場合はオンラインストレージサービスで送付してください。

※データ受領後、数日以内に「受領確認メール」を事務局より送付致します。本メールを必ず確認してください。受領確認メールが届かない場合は事務局までご連絡をお願いします。

応募期間

2023年10月10日（月）～2023/12/07（木）23:00まで

著作権

表彰作品の応募資料として提出された写真・図版等について、AND賞実行委員会は編集出版権を持ちます。また、複写権は本会に委託するものとし、本会が表彰作品の関係資料を展示、記念冊子の印刷、ホームページ等に掲載する場合、無償で使用できるものとします。

応募資料に使用する写真・図版の著作権所有者が応募者以外の場合は、あらかじめ当該著作権所有者の許諾を得た上で使用してください。

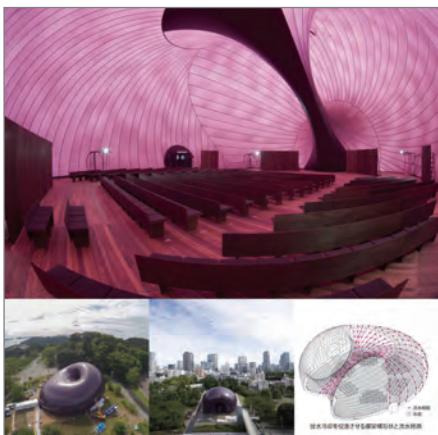
表彰件数

最優秀賞1件、優秀賞3件程度を表彰する。入賞者には賞状及び記念品を授与する。

選考方法

一次選考：書類審査により10作品程度を選定する。

最終選考：一次選考通過者は2024年2月3日（土）開催の最終選考会でプレゼンテーション（プレゼン時間10分程度+質疑応答）を行い、公開審査（一部非公開）により最優秀賞、優秀賞を決定する。



第1回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2020

最優秀賞

LUCERNE FESTIVAL ARK NOVA 東日本大震災の被災地を巡回する移動式仮設空気膜構造

優秀賞

・スケールの異なる複層空間とハイブリッドな屋根構造（福井県年縞博物館）

・TBM PROJECT - CLTを用いた折板構造V字梁 -

・細く短い木材をシンプルにつないでスパン70mを実現する大空間屋根構造

昭和電工（大分県立）武道スポーツセンターの屋根構造における
「構造形態」 - 「部材構成」 - 「接合ディテール」のトータルデザイン

入賞 木頭の家／文化財の復旧過程を見せるための構造手法 - 熊本城特別見学通路 - /自然の力によって波打つ天板

CLTと鉄骨によるフィーレンディール構造 鳥取ユニバーサルスポーツセンター「ノバリア」／垂井町役場

White Tube - サークルパッキングのアルゴリズムを利用したトンネル空間で、来場者に憩いの場を提供 - / CRANKS / 洗足学園 STAGE ON THE LAWN



第2回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2021

最優秀賞

まれびとの家「伝統Xデジタルファブリケーションに構造的な価値付けをする」

優秀賞

・甲陽園の家（LVLを用いた組木アーチフレーム）

・懸垂鋼板が空に漂う KAIT 広場

・閑上の掘立柱 - 震災後に嵩上げされた堤防と共に存するオフィス -

入賞 GALLERY U/a / 山並みに呼応する CLT の連続円筒シェル屋根 <南予森林組合新事務所>

Dタワー西新宿 / CLT二方向フラットスラブ - 木の美しさを活かした環境型ターミナルの設計を通して -
HIROPPA「ありきたりな材料とローテクでつくられた上品な建築」 / RYUBOKU HUT - 流木を構造体とした縄文建築 -

入選 ロッドネットで織物表現 - 桐生ガススポーツセンター（桐生市民体育館） / FUJIHIMURO "氷穴"

Digital Garage "Pangaea" | Super Furniture / SQUWAVE ~木質パビリオンから始まる人と空間の相互作用~

第3回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2022

最優秀賞

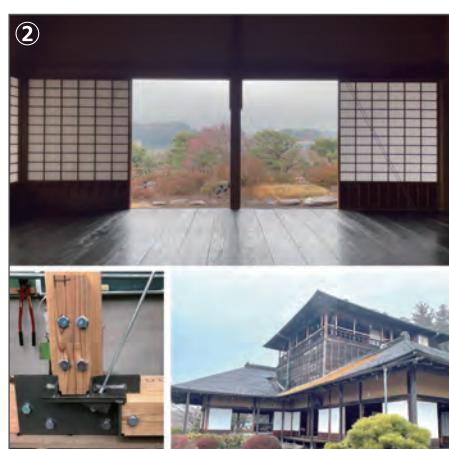
① Yamasen Japanese Restaurant

ウガンダの地元技術と素材を用いた、ユーカリによる木造建築の実現



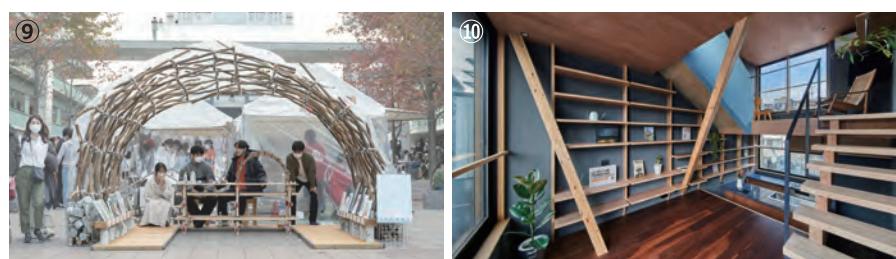
優秀賞

- ② Stealth brace（ステルスブレース） 開放的な歴史的木造建物への耐震補強
- ③ 一松山 本興寺 本堂建替計画
- ④ 出窓の塔居
- ⑤ グラウンドルーフ



入賞

- ⑥ ステンレスの新しい表情を持つ“HAGOROMO BENCH”
- ⑦ 流山市立おおぐろの森中学校～サプライチェーンの構築から普遍的な技術の創造まで～
- ⑧ 千光寺頂上展望台 PEAK 一山頂に浮かぶ水平と螺旋の構造～
- ⑨ WASTE PAVILION
- ⑩ 斜と構





第4回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2023

実行委員長 斎藤 公男

選考委員長 福島 加津也

選考委員 磯 達雄・陶器 浩一・堀越 英嗣

実行委員会 内海 彩・大野 博史・小澤 雄樹・小西 泰孝・多田 僕二・宮里 直也・山田 憲明

運営委員長 三輪 富成

運営委員会 和田 章・神田 順・金田 勝徳・松永 直美・春藤 元宏・麓 絵理子 (順不同)

事務局 A-Forum

101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-5-5 レモンパート II ビル 5 階

TEL : 03-5281-7880 FAX : 03-5281-7881 www.a-forum.info

印刷所 株式会社 グラフィック

2024.02.26